日本医史学雑誌第四十四巻第三号　平成九年十一月十七日受付
平成十年九月二十日発行　平成十年五月八日受理

アメリカにおける人痘接種法
―一七二一年からアメリカ独立まで―（その一）

小田泰子

一　牧師・マザー、ボストンで人痘接種法を推進

人痘接種法が初めて公になったのは、一七一四年にコンスタンチノープルにいたチモニウス Timonius, Emanuel（fl. 一七一三―二一）が、イギリス王立協会の科学雑誌『哲学紀要』*Philosophical Transactions* に報告したものであった[1]ことは知られている。この人痘接種法をボストンにいた牧師マザー Mather, Cotton（一六六三―一七二八）が推進した。

これまでボストンにおける人痘接種法実施を記述した文献は多くはない。シンガー（Singer, Charles）とアンダーウッド（Underwood, E. Ashworth）の著書には次のような簡単な記載があるのみである。「イギリスにおけるレイディ　メアリの（人痘接種法紹介の）努力は、大西洋の反対側で模倣された。有名なピューリタン指導者のI・マザーとC・マザーは熱心にその術を推進した[2]」と。すなわち、トルコ大使夫人レイディ　メアリ Lady Mary, Montague, Wortley（一六八九―一七六二）は一七一七年三月にトルコ大使館付きの外科医メートランド Maitland, charles（一六六八―一七四八）立ち会いのもとで息子エドワード Edward に人痘接種法を受けさせた[3]。それが成功した四月に人痘接種法の有効性を記した手紙をイギリスに送った。トルコではこの手紙の消印の日付を人痘接種法の記念日とし、一九六七年四月一日に人

痘接種法二五〇年記念の記念切手を発行した。[4] メアリはその翌年の一七一八年にイギリスに帰国し、一七二一年四月にはイギリスで娘に人痘接種法を受けさせた。[5] シンガーとアンダーウッドはこのレイディ　メアリの行動がボストンのマザーらの人痘接種法実施に影響を与えたと考えたようだが、それは誤りであることをまず説明する。

マザーの日記によると、一七〇六年一二月一三日にマザーのところに奴隷が来た。その奴隷にマザーはオネシマスOnesimusと名付けた。[6]「これまで天然痘に罹ったことがあるか」というマザーの質問にオネシマスは「イエス、ノウ両方だ」と答えて、自分の腕にある傷跡を見せながら、彼が住んでいたアフリカでは「勇気のある者は天然痘の膿を入れる術を受け、以後天然痘感染の危険から免れる」[7]と説明をした。マザーがこのようなことを聞いたのは初めてであり、その方法が天然痘に本当に有効かどうかを判断することはできなかったが記憶にとどめた。

このことがあってから八年後の一七一四年に、マザーはチモニウスの人痘接種法報告を読み、オネシマスの言ったことを思い出したのであろう。ただちに「天然痘の不思議、一七一六年七月一二日」という題で手紙を書き始め、王立協会の秘書ウッドワードWoodward, John（一六六五―一七二八）に送った。

その手紙にマザーは、チモニウスの述べている術は正しいと考える。というのはマザーはアフリカでなされているこれと似たような術を聞いたことがあるからである、と賛意を表した後、「ウッドワード博士、このことを驚いただけで終わらせるべきでありません。この術をイギリスで実験してみませんか。それで多くの人々が苦しみ、たくさんのお金を費やしているこの病気の危険と恐れを終わりにできるのです。もし、私が生きているうちにこの地に天然痘が侵入してくることがありましたら、私はこの術を実施することについて医師たちに相談するつもりです。きっとよい結果をもたらすでしょう。しかし、これをあなたたちが先にして下さったらどんなに勇気づけられるでしょう」[8]と記した。

この手紙が書かれてから五年後の一七二一年春からボストンで天然痘が流行し始めた。マザーはかねての計画通りボストンの医師たちに人痘接種法を行うように手紙を書いた。マザーの日記には次のようにある。

一七二一年五月二一日　恐ろしい病気・天然痘がこの町に侵入してきた。人痘接種法によって天然痘に罹らせ、またこれを防ぐということは、これまではアメリカ人はもとより、イギリス人によってもなされたことがない。しかし、それがなされればいかに多くの人命を救うことができるか。私は医師団の意見をととのえてこの問題を彼らに任せよう。[9]

この日記の記述から、マザーは、天然痘を防ぐ人痘接種法の有効性に大きな期待をもっており、これまでアメリカでもイギリスでもなされたことのない人痘接種法によって、多くの人命を救うことができると期待し、医師団もそれに当然同意すると簡単に考えている様子がうかがえる。

当時、ボストンでMDをもっている医師はダグラスDouglass, William（c.一六九一―一七五二）ただ一人であった。[10] ダグラスはスコットランドの生まれで、エジンバラ大学で医学を学び、一七一一年にユトレヒト大学からMDを得た。その後ライデン大学とパリで勉強したが、一七一六年のはじめに、マザーと牧師コールマンColman, Benjamin（一六九二―一七四七）宛の紹介状を持ってボストンにやってきて、そのままボストンに住み着いた。[11]

マザーが医師たちに宛てた手紙は次のようであった。

一七二一年六月六日　ボストンの医師たちへの呼びかけ

これまでわが国民には、天然痘に罹らせてそれを防ぐという人痘接種法が行われたことはありません。この方法はこの恐ろしい疾患―天然痘―から多くの命を守ることでしょう。また、ここアメリカではまだ、だれもこれを試みた人はいません。しかし、私はそれを受けた数人のアフリカ人を見つけました。この方法を慎重に取り入れることを提案します、地球の反対側で有効なのですからここでも有効だと考えます。この方法では誰も命を落とすことがないことを私は確信しています。一方、普通の天然痘感染では多くの人が死亡します。また、この方法は熟練し

た医師の管理のもとで術前の準備がなされて行われたことがありません。先生、どうかこれを機に会を開いて慎重にご相談なさって下さい。最初にこれをなさる方に神のご加護がありますように…。[12]

この呼びかけの手紙にマザーはチモニウスとピラリヌス Pylarinus, Jacob（一六五九―一七一八）の報告の要約を付けた。これに対して医師たちは何の動きも起こさなかった。

ダグラスは以前にマザーが王立協会に寄稿した「アメリカ報告」[13]が掲載されていた『哲学紀要』合併号の二九号をマザーに見せたことがあった。[14]たまたま、この合併号には人痘接種法の第一報であるチモニウスと第二報であるピラリヌスの論文も掲載されていた。

マザーが書いた「医師たちへの呼びかけ」を読んだダグラスは「軽々しくものを信じる、愚かな牧師マザーが、（ダグラスが見せた『哲学紀要』で読んで）まっすぐ人痘接種法を行う方向に向かった」[15]と解釈した、それ以来、ダグラスはマザー等に反目することになった。ダグラスという人は「傲慢なスコットランド人で、彼と異なる意見をもつ人を認めようとはせず、一旦持った意見が間違いであってもそれをなかなか改めようとしない人であった」[16]と、ダグラスの伝記を書いたバロック Bullock, C. Jesse（一八六九―一九四一）が言っている。

しかし、ダグラスがマザーに見せたと言っている『哲学紀要』合併号の二九号は、ラテン語で書かれた『哲学紀要』の三三八号（一七一四年）から三五〇号（一七一六年）までを英語に翻訳して合併した号で、一七一七年に発行されたものであった。マザーの「アメリカ報告」は、この号の八五ページから八八ページに、チモニウスの報告は、八八ページから九一ページに、ピラリヌスのものは、二〇七ページから二〇九ページに掲載されている。これまで述べてきたようにマザーは一七一六年七月以前、すなわち、合併号が発行される前にチモニウスとピラリヌスの報告を読んでいたはずである。そうでなければ、一七一六年七月一二日付のウッドワード宛の手紙に二人の論文の要約を付けることはできない

からである、チモニウスとピラリヌスの報告をマザーがいつどのようにして入手したかは明らかではない。[17]

これまで知れているところでは、ダグラスがイギリスから紹介状をもってボストンに来たのは一七一六年六月で、[18]このときには合併号の二九号はまだ発行されていなかった。ボストンに来たダグラスはすぐ西インド諸島に向かって旅立ち、最終的にボストンに落ち着いたのは一七一八年以降と考えられている。[19]すなわち、マザーがダグラスから借りた本で人痘接種法のことを初めて知ったというのは、ダグラスの誤解ということになる。

この論文を入手した経路、時期はともかく、マザーは一七一六年七月までには二つの論文を読んでおり、人痘接種法を行うべく天然痘の流行が起きるのを待ちかまえていたような状態であった、と理解される。

二　外科医ボイルストン人痘接種法実施す

一七二一年六月六日付けでマザーが出した手紙に医師たちが何の行動も起こさないので、マザーは六月二三日に医師ボイルストン Boylston, Zabdiel（一六七九―一七六六）に、個人的に人痘接種法を行うように呼びかけた。ボイルストンはマザーと同様、新大陸ボストン近郊で生まれ、医師であった父とボストンの医師について医学を学んだ人である。[20]次にマザーが書いたボイルストン宛の手紙を引用する。

マザーからボイルストンへの手紙

先生。私はあなたに人痘接種法に関して私の知っているすべてをお見せします。慎重に考えてそれを行おうとお考えでしたら、多くの人命を救うことになるでしょう。しかし、もし、これをなさることに賛成なさらないとしても、他の国でなされている方法について正確な知識を得る喜びをお持ちになれるでしょう。

先生、この二人の著者は、われわれは知りませんでしたが、文盲の人々の間で珍しくなく行われている方法につ

いて書いています。数人の人が一緒に天然痘に罹った人の家に行き、そこで、病人の膿疱を刺し、出た液を片方の手の甲に植えて家に帰り、少し病気になり熱が出て、後は一生天然痘から安全になります。これについて私はかなりの人数の生き証人を知っています。

よく目を開いて考え判断して下さい。われわれを癒す神があなたに指示を与え、これを行わせますように。

あなたの心からの友人であり、召使いである　C. マザー

ボイルストン先生[21]

この手紙にもマザーはチモニウスとピラリヌスの報告のコピーをつけた。ここに書かれている人痘接種法の術式では、人痘接種法を受ける人は集団で病人の家に行き、その家で患者から採った膿をすぐ片方の手の甲に植えるとしている。これは前腕と足の一、二か所に接種するチモニウスの術式とも額・両頬・顎・両手背・両足背に接種するピラリヌスの術式とも異なるものである。アフリカ方式としてよいのかもしれない。いずれにしても、チモニウスやピラリヌスだけではない「奴隷からの情報」と思われる方法が記述されているのは注目される。

ボイルストンは医師としての職業上、家族に天然痘感染の危険が高いことを十分に認識していた。[22] この手紙を読んでから三日後の六月二六日に、ボイルストンは六歳になる自分の息子と、二人の奴隷（三六歳、二歳半）に人痘接種を行った。彼自身は一七〇二年の流行で天然痘に罹っていたので自分に接種して確かめることができなかった。[23]

ボイルストンが行った「この人痘接種が成功したにもかかわらず、人痘接種法に対する反発が起こり、彼ら（ボイルストンとマザー）は生命の危険を感じた」[24]という。人々はボイルストンを非難し、もし人痘を接種された人が死亡した場合には「ボイルストンは殺人者であるから、そのように取り扱われなければならない」[25]として、近くの木に縛り首にするとさわぎ、彼の家には手投弾が投げ込まれ、家族は身の危険を感じて外出できなくなり、彼自身も道で出会った人から

暴言を浴びせられたともいわれている。[26]

マザーは日記に、ボイルストンが人痘接種法を実施したことの喜びと人々の奇妙な憑かれたような反応、そして、その狂暴な行動がボイルストンとマザーに向けられていることを書いている。

一七二一年七月一六日　今、私は言葉に尽くせないほど心が安らいでいる。私は医師団にアフリカ人やアジア人が行っている天然痘の危険を取り去り、そして和らげ、賢明にもそれを適用した人の命を確実に救う新しい方法を教えた。哀れな人々をその恐ろしい疫病の手から救い出そうという申し出に怒り狂った殺人者は、人々を奇妙に虜にした。虜にされた人々はわめき、ののしり、神を冒瀆する。彼らは気違いのように話し、彼らの怒りと毒舌の対象は実験を行った医師だけでなく私にも向けられている。

このことについて私は言葉に表せない喜びと栄光に満たされている。[27]

一七二一年七月一八日　悪魔に魅入られた人々の騒ぎは、私の二人の子供の命を人痘接種法を行って天然痘から救うということを、たぶん妨害するであろう。[28]

ここには、天然痘の危険を去らせ、恐ろしい疫病の手から救い出せるという事実に素朴に共鳴し、確信するカルヴィニストとしてのマザーと、予想外の反撃に戸惑う驚きが素直に記述されているといえよう。

三　医師ダグラスら人痘接種法に反対す

医師ダグラスは激しく人痘接種法に反対した。当時の植民地副知事はマザーの言うこととダグラスの言うこととどちらが正しいかを判断するために、ダグラスにそのことが掲載されている本を見せるように言ったが、ダグラスは、それを誰にも見せようとはしていない。[29]

このダグラスの動きについて、牧師のサッチャー Thacher, Peter（一六五一―一七二七）が次のように書いている。

この町の医師と知識人の多くが強い言葉で人痘接種法に反対した。その中でもダグラスが一番強い反対者で、相手を打ち負かすために合法、非合法を問わず、あらゆる武器を使うことを躊躇しなかった。彼が非難を浴びせかけるために、また、ボイルストン医師の成功を阻むために使わなかった手はなかった。[30]

ダグラスはボイルストンについても「きちんとした教育を受けていない若者で、一、二年間ある種の施術者（practitioner）すなわち薬局、がん治療者、截石者、骨接ぎ、抜歯者のところで生活し、必要不可欠な根本的な知識もないのに、医術のすべての分野に通じていると自分を評価する者」[31]と批判した。医師の免許制度が未確立の時代には、このような医師も多く存在した。内科医の場合、多くは大学で医学を学んだが、外科医の場合には実地の訓練を積んでなる者が多かった。とくにアメリカで最初の医学校が建てられたのは一七六五年フィラデルフィア[32]であって、この論争がなされた当時はアメリカ全土に医学校は一つもないころであった。このような事情から他の「医学論争」の場合でも医学論争というよりは、内科医と外科医との対立という構図も少なくなかった。しかし、『哲学紀要』に人痘接種法報告を寄せたチモニウスとピラリヌスは少なくともダクラスが軽蔑するタイプの医者ではなかった。チモニウスは当時の名門パドヴァ大学を卒業した後オックスフォード大学で学び[33]、パドヴァ大学の教授をしていた医師であり[34]、ピラリヌスはパドヴァ大学で法学と医学を学び、開業の傍らベネチアの公使もしていた医師であった[35]。

ダグラスの人痘接種法反対論の根底には専門外の牧師や外科医が自分の領域を犯そうとすることに対する嫌悪の感情が強く存在していたようにみえる。

こうした視点からすれば証人としての黒人の証言などは次のように一笑に付されてしまうことになる。

彼らの二番目の証人は五、六人のアフリカ人、すなわち、他の人によって黒人奴隷と呼ばれる一群である。彼ら

は、彼らの国で人痘接種法が行われていると今になって言う。たどたどしく黒人語でその話をすればそれだけ信じられるとC.マザーは言うが、それは矛盾している、本当のことを話そうが嘘を言おうが彼らはそのようにしか話せないのだ。彼らほどの嘘つきはこの世にはいない。彼らの国で行われていることについての彼らのこの陳述は、これまで決して論争の種になったことはなかった。私の知る限りでは、黒人の多くは彼らのご主人に、自分の国であれどこであれ天然痘があったことを、また、今ボストンでもそうであるように請け合ってきた。マザーの人痘接種法軍団も同様の運命、すなわち人痘接種法を受けた人も結局は天然痘に罹るという結論に貢献することになるであろう。しかし、そんなあやふやな論争はたくさんだ。この話を確かなものとするために書かれた、人痘接種法に関するとるに足りない二つの文献と、二人の黒人紳士と二、三の人痘接種法推進派の聖職者との愚かなよく知られたインタビュー。まったく茶番劇だ。[36]

つまり、ダグラスは黒人を嘘つきと決めつけ、黒人の言うことは信じようとせず、黒人は主人のいうことであれば何でも「その通りです」と言うとして、黒人を非難したついでにチモニウスとピラリヌスの報告を「とるに足りない二つの文献」として片づけてしまったのである。

ダグラスは「ボストンガゼット」紙上で気を吐いたわけであるが、これらのやりとりの多くは、当時ボストンで発行されていた三新聞、ボストンニューズレター *The Boston News Letter*（「ニューズレター」）、ボストンガゼット *The Boston Gazette*（「ガゼット」）、ニューイングランド新報 *The New-England Courant*（「新報」）上で行われた、ダグラスのような反対論とは別に次のような無署名の反対論もあった。「マホメット教の一団であるアフリカ人を使って人痘接種法を神の教えにかなうものとすることは、マホメットの宗教を真の宗教だと証明するようなものだ」[37]

一方、ボストンにいたベンジャミン・フランクリン Franklin, Benjamin（一七〇六―一七九〇）の兄、ジェームズ Frank-

lin, James（一六九六―一七三五）は一七二一年八月七日に「新報」を創刊した。「新報」でジェームズはダグラスの味方になって入痘接種法に反対した。[38] ジェームズは「新報」の一七二一年八月一四日号[39]と八月二一日号[40]の二週に亘って人痘接種法反対論を掲載した。また、ジェームズは人痘接種法を推進する人たちを批判して「全くナンセンスで、傲慢で、偏見にみちていて、非道徳的で、論争のもとになり、ニューイングランドの人の心を汚し、人々の心を分けるスキャンダル。我々を悩ませているのはボストンの医師たちである、彼らは悪魔の発見である人痘接種法を行っている、その推進者―そのうちの何人かは私もよく知っている生まれつきのジェントルマンで、学問もあり、高潔で礼儀正しく、悪いことをしない人たちであるが―不埒な悪魔の文章を評価し書いている」[41]と述べて人痘接種法に反対している。ジェームズは、人痘接種法がボストン人の意見を分かち、ニューイングランドのよき伝統を損なうと嘆いたのである。これは人痘接種法反対の別な立場である。ジェームズは人痘接種法の天然痘予防効果は問題でなく、これまで、ボストンに住む人たちすべてが一つの家族の一員として、睦み合うような、温かいニューイングランドの伝統を壊すものとして、人痘接種法に反対したのであった。

「新世界」の開拓者として団結してきたニューイングランドに不協和音を響かせている人痘接種法に対して苦情を申し立てるジェームズの議論は別として、人痘接種法に反対する人々の言動に共通して大変厳しい表現が含まれている。いわく、殺人者、黒人への蔑視、異教徒、悪魔…。いうまでもなくこうした論争は医学論争ではなく人痘接種法をどのように見るかという、ひとえに思想や世界観の問題であったと言える、つまり、伝承的療法としての人痘接種法は宗教的、呪術的あるいは異教的儀式、魔女的行為の範疇と区別しがたい点があり、そうしたものへのこの時代の人々の過剰反発、過剰反応的性格ともみることができる。

もっとも、サッチャーのように「ダグラスはボイルストン医師の成功をはばむために使わなかった手はなかった」としてダグラスの行為を記述している点は見逃せない。医師としての名声は臨床的事実、すなわち「治療効果」によるも

ので、サッチャーの指摘はボイルストンが行った人痘接種法の効果を伝えているとともに、早くもそれを見抜いているダグラスの立場をも指摘しているように受け取ることもできる。サッチャーのこうした意見の表明は、名声を得はじめた外科医ボイルストンへの内科医ダグラスのねたみを言い当てているようで、興味深い。

さて、人々の反応があまりにも激しいので、ボイルストンは、自分が人痘接種を行った人の経過を「ガゼット」紙上で説明をした。

私は人々のためになる方法を始めるために忍耐強く、多くの騒音に耐えてきました。この方法は学識のある紳士に勧められて、熟考した末、行ったものですが、私の子供のうちの一人の息子と二人の奴隷に、人痘接種法という人工的に天然痘を与え、自然に感染した場合には命を失う危険がある疾患—天然痘から命を救う方法を行いました。息子が人々の大騒ぎとともに発熱した三日目までは私を非常に恐れさせましたが、手当てをすると直ぐ熱は下がり、天然痘の発疹が出てきました。数週間後にその後を報告します。新しいことですので、誤った手当をすることを恐れて、手当の必要のなかった一人の黒人にはなにも行わず自然に任せることにしました。この人は他の二人よりも一～二日早く症状が消えてきています。他の二人も同様の経過をとるであろうと期待しています。[42]

ボイルストンの報告は簡潔で率直なものであった。これに対して「ニューズレター」に無署名の投書が掲載された。投書者はボイルストンを「截石術者」Cutter for the Stoneと呼びかけ「文盲で、無学で、危険な間違った治療の宣伝者で、これまで天然痘治療の経験がまったくなく、現在治療している天然痘患者も一人もいない」[43]と決めつけている。これは、その文体からいってダグラスが書いたものとフィッツ Fitz, Heber Reginald（一八四三—一九一三）は言っている。[44]

ここで言う「石」とは尿路結石のことで「截石術者」とは、その除去術を行う者を意味する。ヒポクラテス宣誓の中

に「膀胱結石患者に截石術をすることはせず」[45]とある。尿路結石の除去手術がある程度確立されるのは一九世紀も終わりのころのことである。また「截石術者」と呼びかける人物といえば、フィッツの指摘を待つまでもないであろうが、仮にダグラスではないとしても、医学の立場から医学を装った攻撃であり、この時代の人々の過剰反発に便乗した攻撃の役割を持っていたと解せよう。

文　献

(1) Timonius, Emanuel : An Account of the Procuring of the Small Pox by Incision, or Inoculation ; as it has for some time been practised at Constantinople, *Philisophical Transactions* (*Phil. Trans.*), vol. 29, pp. 88–91, London, 1714.

(2) Singer & Underwood : *A Short History of Medicine*, p. 200, Oxford University Press, 1952.

(3) Maitland, Charles : *Mr. Maitland's Account of Inoculating the Small Pox*, p. 8, London, 1722.

(4) 古川　明「欧州に於ける人痘接種法の歴史、とくにトルコ式接種法の西欧へのひろがり」『日本医史学雑誌』第一七巻、第三号、一六九―一七二頁、一九七一。

(5) Maitland, *op, cit.*, p. 9.

(6) Worthington, Ford, C. ed./Mather, Cotton : *Diary of Cotton Mather*, vol. I, p. 579, Frederick Ungar Publishing Co. New York, 1911.

(7) Kittredge, G. Lyman : Some Lost Works of Cotton Mather, *Massachusetts Historical Society*, p. 423, Feb. 1912.

(8) *Ibid.*, pp. 420–423.

(9) Worthington, Ford, C. ed, *op. cit.*, vol. II, pp. 620–621.

(10) Bullock, C. Jesse : Life and Writings of William Douglass, *American Economic Association, Economic Studies*, II, p. 266, 1897.

(11) *Ibid.*, p. 266.

(12) Fitz, H.Reginald : Zabdiel Boylston, Inoculator. And the epidemic of Small-Pox in Boston in 1721, *Bulletin of the Johns Hopkins Hospital* (*B.J.H. Hosp.*) vol. 22, no. 247, p. 318, 1911.

(13) Mather, Cotton : An Account of several Observations made in New England, in 1712. *Phil. Trans.*, vol. 29, pp. 85-88, 1714.

(14) Bullock, *op. cit.*, p. 268.

(15) *Ibid.*, p. 268.

(16) *Ibid.*, pp. 276-278.

(17) Kittredge, *op. cit.*, p. 431.

(18) *Ibid.*, p. 426.

(19) Bullock, *op. cit.* p. 266.

(20) Jonson, Allen & Malone, Dumas, ed : *Dictionary of American Biography*, vol. I, pp. 535-536, New York, 1964.

(21) Fitz, *op. cit.*, p.318.

(22) *Ibid.*, p. 318.

(23) Boylston, Zabdiel : *An Historical Account of the Small-Pox Inoculated in New England*, pp. 1-2, London, 1726.

(24) Jonson, Allen & Malone, Dumas, ed, *op. cit.*, vol. I, pp535-536.

(25) Fitz, *op, cit.*, p. 319.

(26) *Ibid.*, p. 319.

(27) Worthington, Ford C. ed, *op. cit.*, vol. II, pp. 631-632.

(28) *Ibid.*, p. 632.

(29) Boylston, *op. cit.*, p. 3.

(30) Fitz, *op. cit.*, p. 317.

(31) Bullock, *op, cit.*, p. 270.

(32) Cockerham, C.William : *Medical Sociology*, p. 172, Prentice Hall, 1992.
(33) Timonius, *op. cit.*, p. 88.
(34) 古川　明、前出、一六八頁。
(35) Pylarinus, Jacob : A New and Safe Method of communicating the Small-pox by Inoculation, lately invented and brought into use, *Phil. Trans.*, vol. 29, p. 207, London, 1716.
(36) *The Boston Gazette*, Jan. 8-15, 1722.
(37) *The New-England Courant*, Dec. 25-Jan. 1, 1721-1722.
(38) Jonson, Allen & Malone, Dumas, ed. *op. cit.*, vol. III, p. 599.
(39) *The New-England Courant*, Aug. 14-21, 1721.
(40) *The New-England Courant*, Aug. 21-28, 1721.
(41) Fitz, *op. cit.*, p. 321.
(42) *The Boston Gazette*, July 10-17, 1721.
(43) *The Boston News Letter*, July 17-24, 1721.
(44) Fitz, *op. cit.*, p. 316.
(45) ヒポクラテス／小川政恭『古い医術について』一九一頁、岩波文庫、一九八七。

（東北大学大学院 国際文化研究科 博士課程後期）